

中村吉治 作

公孫樹下より

その口を守れば生命を守り

その口を大いにすれば滅び来たらん

ーソロモンの箴言ー

暗より明へ

校庭の銀杏

限りなき哀愁にそそられて ともすると若者が

はかない空想にふける夕

まばらな寒天の星を いただいて

お前は まっくろに校庭のまん中に 巨人の様に立ち上がるのだ
秋をいろどる数多い葉をすっかり篩い落とし

ぎすぎすになった針の様な枝を

寒そうに うち払げて お前は巨人のようになむる

ただ黙す 学校の夜を守る如く

寄宿寮に踊る若者の夢を 黙々として

見つめるようにそそりたつ

夜はまっくらだ

その中で お前はだまって立っている

そして何か考えている

お前は俺れの親友であつたっけ

お前は夜半に眼をさます

くらいくらい夜半に 目をさます

ちみたい風が運動場の一隅に起こる

そして地を這うて スツと南寮の板塀の方へと伝って行く

お前は太いからだを 全体にわたって

うなづく様に大きくゆする

ねづらの鳥が屹度カサカサ騒ぐ

お前は太くホウツと息を吐く 白い息をつく

その白い息は 直ぐ氷の様に固まると お前は思っている

眞闇な夜 お前の白い息は ひとみ神秘的だ

やがて お前は寮の方に眸をむける

まよなかだ

色々な夢が若者の気持ちの好い頭の中を駆けずりまわるのを

お前は面白そうにそれを見る

未来は大臣だの大将だの そんな夢に出あうと お前はたまらなくうれしが

そして巨大な 幹を 根下からグラグラゆする

お前は若者の夢の 現実になることを疑わない

それは幾年も昔 同じような夢を見た若者が ついこの間 帰ってきた

そして とめどなき 感激の涙を流しに來たから
これまで 成功した若者を お前は氣長に期待している だからお前は疑わない
試験の前夜なぞ 寮舎の窓から鈍い電燭が 涙の如く にじみでる
そこには若者が ペンと教科書とにかじりついて 夜をふかす
努力にあきて そのまま つい机の上でへたばる
お前は この若者のために あたたかい聖讃をいのる
「美しいものだ」と お前は叫ぶ
夜がふけにふけて 町の遠くで 月に吠える 犬の蕃声がする

明より暗へ

色々なことを 夜半に起きた お前は見る
やがて星が一つ一つ消える
ポツンポツンと消えると お前は思っている
東の山から太陽が真紅な烽のろしを上げる
あたりは新潮にみなぎって 黎明の嚴肅さが ヒシヒシと お前を抱擁する
そこで お前は あるだけの息を威勢好く 大氣の中に呼吸する
ひやひやした空氣が 新しい聲かおりを持って お前の周囲に ただよってくる
お前はもう一ぺん 夜のことを思い出す
と もうその頃は すっかり朝の氣分に なってしまっている

あの透徹した暁

そこには少暫しばしばく 偉大な沈黙が守られる
その間 お前はヂット何事かを黙思する
午前の七時を山の鐘つき男が報じる
そろそろ空氣が動く
寮舎では一夜の安息を楽しんだ若い学生が
年寄った舎監の先生の点検をうける
すがすがしく洗面した若者は 昨夜の夢なんか すっかり忘れてしまつて
いそいそとして 新しい元氣に満ちている

カランカラン

自習の時間の終わりを告げるベルの音が 寄宿舎の各室にひびきわたる
あちからからも こちからからも 包みをかかえた若者が 廊下を勢いよく走る
愈々 生徒が登校する
お前は待ち遠しそくに 彼らの來るのを見やる

校庭の一角に赤い校門が立っている
幾年も幾年も同じ場で 生徒を呑んだり吐いたりしている
その赤門から いそいそとした学生が 楽しそうにさざめきながら
今日の宿題のできたことや 色々なことを 云いはやしながら
賑にぎやかな調子で お前の下をくぐる様に通る 「お早う お早う」
みんなが心の中でひとりでに こう云っている

お前は嬉しそうに 一つ一つ梢をゆする
ありなしの葉が 時々 お愛敬にこぼれる
一年生なんか 争って拾う
そして本にはさむ

お前は ほんとうに嬉しがる
多くの生徒が悉く登校してしまつて ベルの鳴るのを待っている
その間 時々お前を見上げる若者もある
そして晴れやかな気持ちになつて その若者は 向こうへ行つてしまふ

カンカン カーン

ベルが鳴る 学校の鐘は気持ちが良い

カンカンカーン

若者の自覚を促す様に鳴る なんと聞いても気持ちが良い

お前は何時でも そう思う

若者も皆 そう考えている

若者の心も お前の心も同じようにそう思う

その響が校内の隅から隅まで ひびき渡る

学校の先生は 大きな辞書をかかえて出てこられる

先生も 鐘は好いと思つていらつしやる

金のことなんざ ちつとも考えていられない

まもなく朝礼がすむ

級長が生徒を各々の教室にひきつれる

まもなく講義が始まる

先生の眼鏡が熱誠の焔でもえている

生徒の鉛筆のキシリが異様にサラサラひびく

先生の声も太い そしてハッキリしている

生徒の顔も はればれしている

教室の色が あざやかだ

教室の色が あざやかだ

新しい匂いが 教室一杯だ

寒い朝なぞは ガラスから水蒸気が上る

空気が 流石に ちみたい

けれども先生も生徒も そんな事はかまわぬ ズンズンすすんで行く

中に 時々 傍見する男もない

水蒸気は呆気ない道化者の様に ガラスを這つて外の方に流れて行く

凡てが聖だ 清らかなのだ

そこに人間の「尊さ」がある

そこに人間の「力」が示される

偉大な宇宙が縮図される

「強いのだ それでいいのだ」と お前は云う

お前は遠い校庭から 講堂の屋根越しに 各々の教室を見渡して

ひとりで微笑みをもたらすのだ

はげます如く たたえる如く お前はなんととなく幹をゆする
凡てが精一杯で 努力と真摯とが 向上の焔の中で 燃え狂うている。
それを ほんとに お前は好む

カンカンカーン

お濠の一角から湧き起こるかの様にベルが鳴る
よどみなく いくつかの小さな空気の分子を くぐって ひびいて来る
それは門衛の爺さんが鳴らすわりに 大きくはつきりした声で うなる ひびく
「新」と云うひびきが 爺さんにも宿ってる
そう思うと お前は強められたように うなづく

雑音が雑音をます

休憩時間が来たのだ 一時間の努力に つかれたからだと頭を もりかえすのだ
それで好い それで好い
生徒は 喜々として子犬の様に あの広いグラウンドを駆けずり廻る
元気の好いのは 自分に大きな石を投げつける 鉄弾投げだ と しゃれている
それで好い それでいい
いたずらなのが独乙ナイフで自分にきずつける 忽ちABC・が きざまれた
それで好い それでいい

たわいないのがいて 自分の細い枝にとびつく
恐ろしく感心に なんべんもなんべんも とびつく
柳の蛙だ と云っている
自分は枝を折られても それならかまわない
それで好い それでいい
あとけないのがいて 手に手をつないで 自分の胸を計る
それで好い それでいい

十分間の休みが 面白く過ぎされる

その間 お前は慈母の如く 若者の上に無限の愛をたれて居る

ベルが鳴る

再び授業が始まる そしてまた尊い努力が経験される
お前はそこで祈ったり 喜びを送ったり
からだをゆすぶって うれしがったりする

午後二時

放課の鐘は また格別の賑やかさで カンカン カーンと 若者の胸をおどらす
一日の課業が終わったのだ
お前は感謝でもする様に かえり行く彼らを見送る
そこで お前は再び偉大な沈黙の中に沈まなければならぬ
あっけらかんとした校庭で お前は再び獨りで おらなければならぬ

校庭の銀杏

お前は こうやって この校庭で まあ幾十年 立っているだろう

お前が むっちり芽を出した頃は あるいは数百年以前であったかも知れない
そしてお前は 色々な事件を俯瞰したに違いない

学校の周囲も雲泥の相違を来しているかも知からない

正義のために立った幾百もの人々が

ある時は 自由と叫び ある時は解放と叫ぶ

尊い聖語が お前の木陰で いかにかうちふるへ乍らひびいた事であろう

あるいは いたずらな誤解のために「貴様」と叫び 「知らぬ」と反抗して

いかに残酷な鉄拳が 偉人の様に立つ お前の枝の下で

いくたび まあいくたび くりかえされたか

お前は それらを沢山知っている さまざまな事件を記憶している

そしてこれから未来

お前は その尊い姿で また色々な事件を 見下ろすことだろう

しかし 誰も お前を偉いとは思っていない

だれも お前を偉いとは思っていない

「それで好い それでいい」

お前は そう云う

いつかは彼らの胸の中にお前の姿はよみがえる そうして また いつか

お前を接吻しにくる若者もあるかも知れぬ

「それで好い それでいいんだ」

お前は どこまでも 徹底している

遠くから見ると お前は学校の主の如く思える

秋なぞ まっ黄にもり上がって 黄金の山をかざっている

金冠だ 栄えある金冠だ

お前は 若者に暗示を与える 成功の象徴だ

若者は なにも云わないけれど

心のどこかが お前の あたたかい慈愛の泉に浸っている

「それで好いんだ」

華やかに沈む夕陽に向かって立つお前の姿は

げに 厳肅そのものだ

校庭から 学校から 我々から そして周囲の凡てから

お前は よっぼど偉い 決して忘れることは できない

お前は よっぼど尊い姿だ

お前は 何時倒れるか知らぬ

しかし、その時は万有の幻滅期であらねばならない

それは お前が――

成功と理想の好伴侶だから

(母校国語科の西野耕司先生に査読していただきました)